
回れ右してさようなら。

fyin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

回れ右してさようなら。

【Nコード】

N6532T

【作者名】

f y i n

【あらすじ】

いきなり風景が一変したと思ったら白髪蒼目美形の腕の中でした。フツ、とうとうわたしにもモテ期が・・・なんて馬鹿言う気も失せる状況。首には刃物目の前には二年ほど前に失踪した弟。どうやらわたしは勇者として魔王と対峙する場面で人質としてよばれたみたいです。

巻き込まれてこんにちは。

暑い日だった。

コンビニに行ってアイスを買って食い歩きしていた最中だった。

・・・でだ。

何故わたしは白髪蒼目の美形さんに刃物を首に当てられ二年ほど前に失踪したはずの弟と対面せにやならのだ。

まあ白髪蒼目の美形というのは一瞬しか目に入っていないのでもしかしたらわたしの妄想かもしれないがね。・・・いや、ぶっちゃげそこまで末期ではない。

対面つつても、わたし寝てるフリしてグデンと美形の腕にもたれかかって前向いてないけど。

いや、なんかシリアスな雰囲気だったから、邪魔しちゃ悪いだろう!?

「あ、ねき・・・?」

おう、見紛うことなき姉君だ。

二年もたっちゃって忘れたのかな? おいおいそれは非常に残念な頭の出来をしておるなあ我が弟ながら。

なんて軽い冗談も言えるほど肝は据わっているんですよ、あてくし。

「そうだ。大人しくしてくれないかな。僕だって無関係な人を巻き込みたくはないんだよ。」

僕? ぼくと。はい、斜め上に行く一人称ですねー。以外。なるほどこの人いい人だ。わたしの中の評価がちょっとだけ上がった。

それとこの人の声あの方に似てる！オカンとか片目とか綺麗なお父さんとかの声やってる人！！・・・たとえばマニアックでわからないね。

「離せよ、人質なんて卑怯だぞ！」

弟よ、負け犬の遠吠えにしか聞こえんぞ。
まったくけしからん。卑怯だろうが非道だろうが勝ち負けは勝ち。負けてしまえばそんなのは言い訳にしかならんよ。

「話を聞きもしないで切りかかってきた君にとにかく言われたくないな。」

話し合いつて大事ですよー。
まあいいや。というかい加減この姿勢辛い。眠っているフリって結構辛いもんがあるぞコレ。

「お、れは・・・国のためにここまで来たんだ！お前を倒してみんなのところへ帰らないといけないんだ！！」

「へえ・・・？」

ぷつりと、頭のどこかでなにかが切れた。

巻き込まれてこんにちは。（後書き）

ノリで書いた。短編集のほうに投稿しようと思いましたけど長くなりそうなので連載。

姉はこういう性格なんじゃなくて突然のファンタジーな展開により変なテンションに陥っているだけ。

お説教してさようなら。

「なるほど、じゃあお前は家族を捨てたわけだ。」

冷えた。萎えた。失望した。

おう、なんという三連打。お姉ちゃんの匠によって作られたガラス細工のような心は砕け散ってしまったよマイブラザー。なんて、ふざけるのも大概にしないと。

あらあらまあまあ、わたしが起きていたのに気付いていなかった弟は目を見開いている。

後ろの方でもわずかに息を呑んだ気配がした。

「そんな、そんなわけないだろ!？」

驚きつつも言葉の意味を理解した弟が食らいつく。

わたしは顔を上げて弟を見据えた。

あれ、後ろの方にRPGのパーティにいそうな連中が・・・なるほど仲間か。

「えー？ 違うないよ。だってお前二年もこっち帰ってきてないし、魔王倒すってアレだぞ？ 殺すんだろ？ じゃあ命の保障も出来かねるってことだろ？」

お前は向こうに残してきた家族も友達も生活もゼーんぶ捨ててこっちに身をおくことにしたってことだろ？」

苦虫を嚙んでいるような表情の弟。

なに、その顔。実はどこかでわかってたんじゃないの？

「わたし達がさー、どれだけ心配して悲しんだと思ってんの？お前、目の前のことしか見えてないのは美德にもなるけどさ、残してきたものの事 考えたことある？」

「アヤトは国のために必死だったの！仕方のないことじゃない！！」

そう底うのはパーティの一人の女の子。

華奢な体つきで、白で統一された服を着ているかわいこちゃんだ。

「そうなの？」

「そうだ・・・」

「ふうん？でもねー綾斗。わたしはさー、何かのためって言うのを言い訳にして、責任だの後ろめたさだのを綺麗に纏めちゃうのって、あんまり好きじゃないんだ。」

地雷踏んだね、残念。

お説教してさようなら。
(後書き)

弟が可哀そう。

言い訳聞いて押し黙る。

そして逃げないんで離してくれませんかね美形なおにーさん。

くるしい・・・いや、弟に酷いこと言って胸を痛めるとかそういうことじゃなくてさ。単純に首絞まってますホントまじ勘弁。

説教中に呼吸困難起こして倒れるとかどんな羞恥。

こうしていると、不思議だ。文面にシリアスさが出てこない。なんてことだ。

「でも、でもさ・・・どうしようもないだろ？もう二度と、あっちには帰れないって」

「はあ？」

え、何この流れ。わたしも帰れないてきな？ははっ、スチール缶踏んで転べばいい。

スケールが小さいとか、このさい気にしちゃいかんのだよ。

勢い良く、振り返った。

引かれた。地味にショック。

「あの、痛いんでそろそろ離していただけません？いや、わたしの顔面がもともとイタイのは知っていますですがそのことではなくて・・・首、締まってるんですけど？」

誰もつつこんでくれないというのは寂しい。

いや、シリアスな場面でボケたわたしが悪いんだけども。

まじめに苦しいと訴えたら離してくれた。うん、いい人。

じゃあさっそく、話し合いしましょうよ。

にっこりと精一杯の笑顔を浮かべたのに、引かれた。

わたしの心は修復不可能なレベルで粉々だ。

言い訳聞いて押し黙る。(後書き)

早いけど、サブタイトルのネタがつけました

話し合い後滞在決定。

曰く、魔王とは呼ばれているが魔族とかの類ではないらしい。

曰く、魔獣が人を殺しまわっているのは主に知能の低いのであって魔王の命令とかじゃないらしい。

曰く、この国には人外が他より多く集まるだけであってそういった類の国ではないらしい。

曰く、もとの世界には帰せないらしい。

そう、帰せないんだ。色々とはしよったがここ肝心だ。
か え せ な い ん だ っ て さ !

「帰せないだけであって帰れないわけじゃないから・・・多分。」

くそう、白髪蒼目の儚げ美人め！その美貌は女であるわたしに喧嘩を売っていると思えない。
というわけで弟を殴った。

「ひでえ！」

「どこが？」

冷め切ったふうに言えば涙目で見つめてくる弟。
くそう遺伝子の神秘め。そのイケメン顔の遺伝子なぜわたしの方に来なかった。

まあ八つ当たりをしても仕方がないわけだが、せずにはいられないだろう。

なんということだ、わたしはまだ今月のお給料を貰っていない。働き損。どうしてくれるんじゃない。

「その方法が見つかっていないというだけで、帰れないと決まったわけじゃないと。」

「そうなるね。」

ほぼ絶望的じゃねーかコンチクショー。
自暴自棄になるな自分。オトナの余裕を持とうぜ。

「呼び出しちゃったのは僕だから、責任は持とうと思ってるよ。だからその方法が見つかるまで、観光気分でここに滞在するといい。」

「魔獣とやらが出るこの国で？」

「なにも人を襲う輩が右往左往しているわけじゃないから安心していいよ。」

こっちで死ぬことになったら枕元にでたあげく祟り殺してやろうと思った。

仕事がない日にこんにちは。

とまあ色々あったが、色々はしょって滞在一日目だ。

とは言いつつも布団から出れていないわたし。

ものぐさなんだ。働かなくていいなら昼過ぎ・・・いや、一日中寝ていてもいい。

「はい起きてー」

とは問屋がおろさないらしい。

まったくなんなんだこの王様は。さすが声がオカンと一緒にすねー。とりあえず眠いんで寝させてください。

「とりあえずこれからのこと色々話そうと思ったんだけど・・・」

「一人称を俺様にしてアハーて笑ってください。」

「・・・部屋の外で待ってるから着替えてきてね。」

なんだとっ スルーか。

くそうつつこみもなしか。全く、つまらんやつめ。

などとぶつくさ言いながらも着替えるのはわたしが所謂ツンデレというものだからだ。と昔友達に言ったら冷ややかな笑顔でH・E・N・T・A・Iの称号をもらった。

わたしのHPは赤まで下がった。

『べっ、別にアンタのために着替えて出てきたんじゃないからねっ！』と言ってやろうそうしよう。

・・・・暫く考えて、自分で自分を追い詰める必要はないなと思った。

Sは繊細なんだ気をつけよう・・・わたしSじゃなくてNだけど。

仕事がない日にこんにちは。 (後書き)

主人公が変人だとうしよう。；

説明会後さようなら。

「姉貴！」

「おや綾斗。」

「平和協定を結んだから勇者はもう用無しになったはずだね。」

わたしより酷い。

先ほど廊下と一緒に来ながら話しながらきたのでわかったけど、この人天然で毒舌なんだ。

いや、最初は確信犯かと思っていたけど・・・ほら、あの、笑顔が黒くないんだこの人。

友達にすげえ黒い人がいたからわかることだねえ。いやぁ感慨深い。

「なんで綾斗がいるんですか？」

「なんでって、帰れることになった時のために二人一緒にいたほうがいいだろう？」

柔らかに微笑む彼は確信犯か・・・いや無自覚め。

まあとりあえず、向かいの席に腰掛けた彼が目で示したので大人しく座ってやった。

うおっこのソファ柔らかい、感動。

「衣食住はこっちで保障するよ。あと、街に行きたいときとかは言うてね。この城の中は自由に歩き回っていいから。」

うんまあ、部屋から出る方が少ないとは思うけどさ。

あ、胡乱気な目で見てきた。顔に出ていたらしい、どうしよう不規則な生活がバレバレか。

・・・まあいいや。

三十近い、いや四捨五入すればまだ二十・・・いややっば三十だわ。とりあえず今更私生活の補正なんてしようがない仕方がない。

「なにか他に聞きたいことはある？」

色々と説明してくれていたようだが日常のことは近くにいる人にも聞いておけばいい。

というわけで申し訳ないとは微塵も思っていないわけだ。

「ないです。お忙しいのにすみませんね。」

にこりと微笑んだらにっこり笑顔で返された。

なるほど、嫌味だと気付いていない様子だ。

説明会後さようなら。(後書き)

グダってきたんで次話進めます。

回れ右して今すぐ帰れ。

「恋は戦争・・・か。なかなか的就についているじゃないか。」

「なにキャラ？ちょっとちよつと姉貴、オレだけをこの現状においていけないでよ。」

肩を掴み揺さぶってくる弟が鬱陶しい。煩わしい。

わたしの部屋にいる男子三人・・・何故この状況にいたったかと言え、うん、色々あった。割愛しようじゃないか。気にしてはいかん。

「まああえて言うのなら・・・いやんっとうとうわたしにもモテ期がつう、ええっ・・・気持ち悪い。言い切る前にダウン。ちよつと本気で気持ち悪かった、すまんね弟よ。」

「いや姉貴自分の言葉にダメージ受けすぎでしょ！」

「ちよつとトイレ・・・。」

「いやいやいやっ！」

口を手で押さえ顔色を変えるわたしに本気で焦る弟。
これくらいでびびってんじゃねえよ勇者なんでしょあんた。

「お姉さま！」

「きみのお姉さんになった覚えはないよ。」

というか事の原因はきみだから。

『アヤトは国のために必死だったの！仕方のないことじゃない！！』
と庇ったのがこのこだ。

「お姉さまのあの言葉を聞いて目が覚めましたの。私わたくしずっとお父様
や周りの方たちの用意した道しか進んでいなかった・・・自分の意
思で決めたことがなかった・・・気付けたんですの、私は生まれ変
わったのです！ だから

私のお婿さんにきてください！！」

「わたしは女だ。」

とりあえず、今すぐ帰ってください。

二度と来るなどとは言いませんがドアを破壊してくるのと、本当に男
かどうか疑いたくなる女装で詐欺るのはやめてください。

回れ右して王子がきた。

「ふむ……。」

悪い物件では、ない。決して。
だがよく知りもしない土地で気を急ぐのもどうかと思う。

まあ今のくだりで考えているのは土地でも家でもなく、人間なワケだが。

「どうしてボクではダメなのですか？」

「まあ……金あり、性格良し、顔も良しとくればこれはかなりの優良物件だと思うけどさあ。」

「……まあぶっちゃけちゃうと、面倒臭いんだよね。」

「そんな爽やかな笑顔で言うこと!？」

文字どおり爽やかな笑顔で言えば、相変わらずキレのいい弟のツッコミが入った。

ちなみにわたしは薄い茶髪に蜂蜜色の瞳でいかにも王子といった笑顔の少年を前にして、ちよっと混乱気味だったりする。

「あとわたし、シヨタ趣味じゃないんだよね。」

「? シヨタ？」

「少年好きってことだよ。きみいくらなんでも年離れすぎでしょ。」

「4〜5才差くらいでしょう?」

「いや、わたしと君じゃ7・8才ちがうと思うよ。」

可愛らしく見上げてくる（わたしの胸くらいに顔がある）少年に頭が痛くなる。

とりあえず年下に弱い姉気質なわたしとしては、どう断わろうか悩むところではあるんだけどさ。

20代後半なわたしに、15・6の少年はキツイ・・・

回れ右して王子がきた。(後書き)

オチなし。

回れ右して後戻り。

突然ですが、姉貴が記憶喪失に陥りました。

ここ7・8年の記憶を失っているようです。ちょうど荒れていた時期まで戻ってしまったようです。怖いです。マジで怖いですお姉様。

原因はシアナの飲ませたクスリだそうです。なんかあやしげな薬だなとは思っていました。ゴメン姉貴。

あとシアナっていうのはあの女装男子です。

「どーしたもんかね。」

「綾斗、お前全然焦ってないだろ。」

「いやむしろ一番焦ってんのオレだからね？あの恐ろしさ知ってるオレだからね？」

ヤンキーではなかったけど超怖い姉貴。

あの時は俺様何様お姉様で、口も悪いし？口より手より足と拳がでるし？

とかなんとか言っているとドアが壊れるんじゃないかと思うほどのけたましい音がドアからした。

ああ懐かしいなあ・・・うん。こんな感じだった。

「なに？姉貴。」

「10秒以内にあげろや。」

「本当すみませんでした。」

ガチャリと開ければ般若の顔したお姉様。（笑顔）

ああ目から心の汗が止まらないんだけどどうしよう。

大丈夫だ耐えろオレ。あと数時間の我慢だ。きつとシアナがなんとかしてくれるから。

というかそれまでにはきつと薬の効果きれてるから！

それにほら、シアナとも一緒にいるし？

一人よりマシだって・・・あれ？おかしいな。さっきまでいたアイツがいないように見えるんですけど？

・・・・・・・裏切りやがったなコンチクショ！。

「で？俺がなんだって？」

あ、あの俺様何様のくだり聞いてた系ですかそうですか。

とりあえず姉貴をみたら、それはもう天使のような笑顔でオレを見返してきた。

「・・・・・・とりあえず土下座するんで許してください。」

「おう、心の広い俺に感謝しろよ？」

「・・・・・・・・額に地面の跡が残るまで許しを乞えバカヤロー。」

とりあえず早くいつもの胡散臭い笑顔に戻ってくださいお姉さま。

回れ右して後戻り。(後書き)

この二時間後には戻りました。

右向け右でおやつ時間。

突然だが、ミックスジュースなるものの話をしよう。

何故そこへたどり着いたかというのは聞かないでほしい・・・だいたいわたしの話は突然に始まり突然に終わるものだから！

まあフルーツミックスジュースは好きだ。

〇〇と△△のオシドリ夫婦は認めよう。だがしかし・・・

「牛乳とフルーツのオシドリ夫婦なんてわたしは認めない！」

「いやなんのハナシ!？」

力強く握った拳を机へ叩きつければ食器がガシャンと音を立てた。ついでに綾斗のツツコミも火を噴いた。

「なんとなく予想はつくけど、『今ジブン上手いこと言ったんじゃない?』くらい思ってるでしょ。」

「そこまで解ってしまうとはさすがシスコン。姉の考察がストーカ―並だね。」

「いやそこまでじゃないですけど!？」

シスコンの部分は否定しないのか綾斗。

・・・・・・本当にシスコンだったんだ。

ためしに何故わかったのか聞いてみた。

「いやだって、姉貴のドヤ顔みたらわかるよ。」

失礼だと思った。

「姉上様は本当に面白いですね。」

「いや本当にいい子だね君は。」

深くは聞かないけど。

さすが王子な容姿なせいか純真無垢な少年にしか見えない。
最近ストーカーみたいになってきたけど・・・いや、あの時折見かける小さい影は彼ではないと思い込んでおこう。

「まあ色々脱線したけど、要はフルーツ牛乳が苦手なんだよ。」

だから今度から出さないでね。
というか、この世界にもフルーツ牛乳あったのか・・・。

右向け右でおやつ時間。(後書き)

サブタイトル入力し忘れて戻ったら消えてた。泣いた。
でも気合で打ち直した。

風呂上りは牛乳派な主人公です。

回れ右して本性が出た。

「あつ、久しぶりじゃねーかロキ！」

「黙れカス。」

んん？あの子はダレ？

薄い茶色の髪に蜂蜜の瞳を持つてはいるけどいかにも冷血王子といった風貌なあの子はどなた？

・・・と、物陰から見守るわたしは思いました。

「相変わらず姉貴の前じゃないとキツイなお前。」

「・・・」

姉貴って誰、姉貴ってわたし？

ちよ、じゃあアレソックリさんでもなんでもなくあの少年王子本人？
うわマジかー。てかロキっていうんだあの子。

ヤベ、目合った。

それはもうバチツと効果音がつきそうなほどに。

「お姉さん！」

なんという変わり身の早さ。ナポーもビックリだね！

先ほどの冷やかな目が嘘のように純真無垢な瞳が大人なわたしには眩しいぜ！！

・・・ふう。

「つつこまないかな、オレ。」

チラと目で訴えかけたら呆れたような目で返された。酷す。

とりあえずこちらに駆け寄ってきた可愛らしい実の弟よりも弟らしい彼に目を向ける。

「ちよさすがにそれは酷い!!」

さすがにつつこまれた。

まあそれはいいとして少年王子の変貌ぶりまでもスルーするとして・
・・

とりあえず、キミ達人の部屋の前でなにしてんの？

「姉貴の顔見に。」

「ボクも同じです。」

笑顔で言う二人にふーんと適当に相槌を打ち、にこりと笑ってやった。

「なるほどよくわかった。今すぐ帰れ。」

回れ右して本性が出た。(後書き)

こんにちは。もしくは今晚は、おはようございます。このトップコート塗りづら！なf y i nです。

相変わらずグダグダ感な連載申し訳ありません；

王子の名前に数分悩み外国人の名前を検索しようとしやっばいやで投げたところ、目に入ってきた某探偵な漫画。とりあえずで決めた名前・・・

あと、このネタ知ってる人しかわかんねーよオイと思いつつも打ち続ける。

主人公は声フェチな隠れオタクです。

回れ右して自己紹介でもしよう。

余談かもしれないが、この世界では自己紹介をしない不躰極まりない奴が多い。

シアナちゃんやロキ少年お名前はなりゆきで知った。魔王とその他もろもろ合った人の名前は知らない。

……いやぶっちゃけちゃうと名乗られても覚えてない場合が多いけどさ。

というわけで、せっかく自己紹介を親切にもしてくださった吸血鬼くんが目の前で号泣しているわけだけど……さてどうしよう？

「ということで親切なわたしは理由を聞いてあげようと思う。」

「なにそのナレーション。だいたい姉貴の開口一番『ゴメン誰だっけ？』が原因だからね!？」

「お兄さんせっかくの美貌が台無しですよ？」

「無視!？そしてそれはキレーな姉ちゃんあたりに言うべき台詞だと思うよ!」

地味に傷ついている弟は放置でいいとして、このキレーな兄ちゃんどうしよう。

暫く見ていたらなにやら呟きだしたので耳を傾けた。

「ううっ……いいですどうせ某なんてっ、目立たないしいても空気だし……っ」

なにこのコ面倒くさい。

黄金の髪に紅玉の瞳は今濡れていてなんか色気あるうわ爆発しろ。
というか某って随分古風だなオイ……あつ。

「……そうだ、ユキちゃんだ。」

唐突になんの感動なく思い出した。

そうだよそうだよ愛しのユッキーと同じ一人称で名前もちよつと似ていたから思い出した。

「誰だよユッキーって。」

「まあわかる人は仲間っつーことだよ。」

せっかく教えてやったのにその気のない返事は何だよ。まあいいや。

とりあえずユキちゃんに向き直って話しても聞こうじゃないか。

「某のご主人様になってください!」

「………生憎そんな趣味はないんだ。」

爽やかな笑顔とともに断わってやった。

あとよくよく聞いてみればS M的なそれではないらしい……うん。
よかった。

回れ右して自己紹介でもしよう。(後書き)

「姉貴って酷いよな。」

「まあ過去の過ちはロストしてしまえばいいよ。」

「流せっつかオイ。」

「うまいね!」

「いや全然!」

本文に入れなかった会話。

テンションだけで突き進むとどうもグダる傾向にあるようです。

回れ右して夢から覚めた。

「んー・・・？おはよう綾斗。」

本日5個目の目覚ましがあったところで目が覚めた。

なんだか長い夢を見ていた気がする・・・まあいいか。思い出せないということはさほど大切なことでもなかったのだろうと無理やり結論付ける。

「おはよう姉貴。もう昼だけど。」

「いいじゃないか、今日は休日だし。朝ごはんちゃんと食べた？」

「うん。ついでに昼飯もう済ましてる。あとオレ部活あるからもういくね。」

「おう、いつてらっしゃい。」

元気よく爽やかにいってきますと言う綾斗を見送り、昼ごはんを一人で食べた。

なんだか久しぶりに静かに食べたなんて、頭をよぎったけれど・・・久しぶり？

久しぶりなわけがなかった。ここ最近は連休で弟と休みが被らず親もいないので一人で食えることが多かったはずなのに、どうして？

「・・・ん？」

なにか大切なことを忘れている気がする・・・いや気がするんじゃないかって、確かに何かを忘れてる。

なにを？わからない。じゃあなぜ悲しい？悲しいの？可笑しい。何故かわからない。

頭の隅に残る記憶の断片・・・

蒼い優しい目が、見えた気がした。

「あれ？」

何故か、涙がこぼれた

大事なことなのに思い出せない。もやもやしたものを吐き出すように、わたしは意味も理解しないまま静かに泣き続けた。

回れ右して夢から覚めた。(続)

「……という夢をみたんだ。」

「一ページまるまる使った解説どうもありがとう!!」

自棄になるなよ綾斗。

「相変わらずキレのあるツツコミ、こっちこそありがとう。」

「いやそんなことでお礼言われても嬉しくねーし!」

いやお前そこはシスコンとして『姉貴にだったらどんなことでもお礼言われて嬉しいよ(笑)』くらい言えよ。(笑)が若干苛つくけどさ。

仕方ないよ、だって暇だったんだもの。

「なんでも『だもの』をつければいい事っぽくなると思うなよ?」

「やだな、そんな短絡的じゃないよわたしは。」

それよりも視線が痛い。綾斗の後ろにいるシアナちゃんとロキ少年の視線が!

夢の最後で見た瞳の色が何故金色じゃないんだ浅葱色じゃないんだと煩い。

ちなみにロキ少年は自分の瞳の色を金色だと主張。蜂蜜色と大差ね

「じゃんとは思った。」

「一丁前に嫉妬してるようだけど、別にあの王様が好きなわけじゃないから。」

「本人の前でそれは酷い！」

毎度のごとく綾斗のツツコミでこの話は終了した。

回れ右して夢から覚めた。 (続) (後書き)

というお話でした。

お気に入り登録&評価ありがとうございます ^^

右向け右で朝のご挨拶。

「おはようございますご主人様！」

「・・・・・・・・・・近い。」

直後頭をよぎったメイド喫茶の可愛いお嬢さんは忘れよう。

低血圧なわたしを舐めてはいけない。起こしに来た人は運が悪ければ近くにある電気スタンドで頭をガツンだ。

「ご主人様はやめてくださいあとコーヒーください。」

「もう用意してあります。」

とある狐くんを連想してしまった。

あと君どうやって入ってきたの。鍵閉めたと思ったんだけど・・・・・・
ああうん、察した。歪になったドアノブを見て全てを察したさ！

「やあユツキーおはよう。」

あとわたしを起こすときは注意した方がいいよ、寝惚けてなにをやるかわからない。」

たしか一度綾斗が頭から血を流して倒れていたことがあったな。

あれはわたしもびびった。

というわけでわたしなりに第二の被害者が出ないように頑張っているワケだけど、被害者が減ったかという問題は別だ。

「先ほど足蹴にされましたが、あなたからの愛だと思えばなんてことありません。」

「わたしにそういう気持ちの悪い趣味はないからね？」

さすがにドン引く。

せつかなので淹れてもらったコーヒーを飲んでいると綾斗がきた。
ノックもなしに入ってきた。

・・・ノックもなしに入ってきた（ここ大事）。

「なななななんでここにいやがんだド変体ヤロー！！」

「変質的な部分は誰でも持っているものでしょ？」

「開き直りやがった！」

なんだかわたしを抜きに言い合っているが、まあいいや。
とりあえず今日も平和そうだなと思った。

・・・あれ、そういえば何でユツキー朝っぱらからわたしの部屋にいたの。

右向け右で朝のご挨拶。 (後書き)

オチなしというオチ。

回れ右して小鳥を拾った。(前書き)

庭を散歩していたら空から鳥が飛び掛ってきたようです。

回れ右して小鳥を拾った。

突然だが鳥の話しよう。

いや、鶏がらスープが美味しいとか鳥の腿肉美味しいとかそういうグルメな話ではない。
単純に鳥の話。

そう、鳥はとても軽い。

何故か。それは鳥は空を飛ぶために骨まで軽量化されているからだ。
そう、だから・・・

「君は病気じゃない。断じて。」

「うえええええ・・・だつてえ、綾斗があ・・・」

「いやだつてけっこうな高さから落ちてきたのにあんな軽いなんて・・・」

綾斗、お前は少し黙っとけ。

深い溜息をつきながら目の前の少女を見る。

波打つようなブロンドの髪にエメラルドの瞳。全体的に白で統一されている清潔感溢れる服装。

きわめつけは、その背に生えている翼。

「いやだからあ、君らみたいな空を飛ぶ生き物は全体的に軽いものなのお。」

だーかーらー、そんなに落ち込む必要はないよ。」

何かだんだん面倒になってきた。

しかもだからって二回も言っちゃったし。

「そうですがあ・・・？」

とりあえず顔を拭きなさいよ、可愛い顔が台無しじゃないか。

ここで拭いてあげるってわたしそうとう優しくない？ まぁいいや。

「はい、解決ー。君もこれからは容易に他人に抱きつくのはやめようね？」

「・・・・・・・・はい！」

笑顔で言えば一拍遅れて元気な返事が返ってきた。なんか子犬拾っちゃったみたいな気分になってきた。

・・・・・・・・まぁいいや、可愛いし。

回れ右してツツコミ不在。

わたしは今、かつてない苦悩に悩まされている。

必死に目を瞑りこの手にあるものを奪われないようにひたすら抵抗していた。

だけど、わたしの無きに等しい力では当然かなわないとわかっていく。けども・・・！

次の瞬間、刺すような冷気がわたしを襲った。

「はいもう起きようねー。」

「寒いんですけど！すみません一刻も早く返してください決闘中です。」

「温かい布団の魔力にはどうやっても勝てないでしょ君。」

せめてものの抵抗に手元にあった枕を投げた。当然避けられた。

それくらい受け入れろ。綾斗は甘んじて受け入れていたぞ。↑避けられなかっただけ

というかぐーたら二度目を決め込もうとしたら起こしに来るとかどんなオカン。

まったく冬の申し子みたいな容姿しちゃって。というかユキはどうした。

「申し訳ありません、敵の温かい魔力に阻まれまして遅れました。」

「お前もか。」

寒色よりも暖色の多いやつに起こされたい。こんな寒いときには。まあ隣に一緒に寝たこがいるからまだ大分あったかいんだけどね？

「・・・ん、おねえさま？」

「あ、おはよう。やっと起きたね。」

眠たそうに目をこするアンジェ。

わたしと目が合って何故か驚いたような顔をした。

「私ったら・・・お姉様と一線越えちゃった!？」

「いやわたしそんな趣味ないよ?」

飛躍しすぎにもほどがあるでしょ。

回れ右してツツコミ不在。(後書き)

「やっぱり綾斗がいないとツツコミいなくてグダるね。」

「オレをどれだけ酷使するつもり!?!」

というお話でしたー。

アンジェは前の話で出てきた天使です。

右向け右でハロウィン。

「ようー弟ようー、何してんのかなー？」

魔王と雑談しているっばい綾斗に声をかけた。

ぎょっとした様子で振り返る弟になんだなだ不満そうな表情を作った。

「げっ・・・姉貴。」

「『げっ』とはなんだよ、酷いな。まあいいや、何話してたの？」

「いいいいいい今忙しいからっ、あっち行っててよ！」

どもりすぎていて怪しすぎる。

「というか魔王静か過ぎないか？」と思いきや綾斗の向こうにいる魔王を見ると・・・なんか熱い目で見返された。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ、何ということ!？」

「・・・・・・・・あ、や、と?」

「いやいやいやオレのせいじゃないねえよ!？」

ないという意味の日本語二回も言って色々おかしいぞ。

「アヤカ。」

ピシャッとどこかで雷が落ちた気がする。

ちよ、えちよ・・・ちくしょー何故ケータイ持ってきてないんだ！
わたしの馬鹿！！録音できないじゃん！！

「・・・姉貴、某キャラに名前呼ばれたみたいーとか思ってるだろ。」

ちがうぞ綾斗。わたしはあのキャラではなく声優さんを愛してるんだ。

まあキャラのほうも好きだけどね！

なんて言い合っていたら、いつの間にか目の前にきていた魔王に手をとられて手の甲にキスを落とされた。

おいおい本格的にどうした魔王。ここでときめいちゃうような展開にはならないけども。

・・・これ年食ったってことか？ と本気で考え込んでしまった。

「というワケで綾斗、説明。」

「えー・・・なんか今日ハロウィンかなんかで、お菓子持ってなかった魔王にイタズラしちゃいましたっていうオチなんだけど。」

不満たらたらずーみたいな感じで答えてくれた。

なにが『しちゃいましたっていうオチなんだけど』だよ。なんだよソレちつとも面白くねーぞ。

「そのイタズラってなによ。」

「惚れ薬（異性限定）盛らされた。」

なるほど。今何故魔王に抱きしめられているかという疑問は解決した。

というワケで離してくれませんかね魔王さん。

右向け右でハロウィン。(後書き)

甘さもへったくれもありません。

薬の効果は二時間後に切れました。

そして主人公はそう簡単にキスされたり抱きしめられたりするんじゃないよとされた本人に怒られるというオチ。
あとさりげなく初・主人公の名前呼び。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6532t/>

回れ右してさようなら。

2011年10月31日22時06分発行